

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5

7



東古戰錄

一

關東古戰錄序

夫中國有史官記於國事辨於邪正以故豪傑名賢之傳記瞭然乎數百千年後矣然嚴兗之賢海邊之英往二其事湮滅識者傷之本朝史籍至少偶免於兵火者幾存耳世人之耳聞金鼓目見旌旗而已何暇為明王英臣之行事不傳于後世宜也

卷一
讀三木氏所錄關東古戰錄考其支跡自古
不載正史野史巷說之所漏也豈得不有
事者附會之說邪偽記可惡拋書廢之竊惟
戰國之間侵掠暴伐關左尤劇人性剛廉不
用記臆並所稱之名將事迹傳其虛失其實
亦唯不寡忠義傳何妨真贗渾々不昧者其
心乎再把其書讀之若義連之慈仁寬大神

威不測有人君之度實漢高明祖之風也若
爲明之出處計略智術忠信大志不讓留侯
武侯時範以下五英之武勇忠義樊灌關張
之徒也義黨數百人可齊鑣於田橫義士婦
人貞烈勇操亦一時之稱也天造地功自所
謂風雲之集會也悲哉天不偕之年地不待
其所數年而皆早世其大圖遠謀善行美事

泯沒不傳抱志者觀之未嘗不潸然揮淚也
豈問其書真贋哉當其亂離之間不失大倫
臣能死節婦能守貞士卒蹈義之不可加則
千載之美譚也後世君上臣子之鑒戒何加
之哉何加之哉於是乎余黨三木氏所錄而
叨爲之序告四海之同志矣

元文庚申季秋 東都

高泰識



古
畫
贊

三木成爲述

足利左京亮源義連

賢明聰敏慈仁
大度威而不猛
萬人景慕



全部画圖 北尾重政寫

長尾監物為明

智謀深遠軍畧
秀群能達經濟
能通天文



一色 太郎左衛門時範

形容雄壯大膽
使氣膂力擘山
千軍怖畏



城戸次郎持廣

志如金鐵忠誠
冲天馳聘生風
一槍當千



山形八郎季照

射御佐達義氣
赫々容貌秀麗
眉目如画



小指半七郎

雙龍飛騰擊劍
通神膽氣堂々
眼光射人



鹿島惡次郎



親兵畧傳

西田伊豆兼武

生園下総生得沈慎にして智勇兼備ま軍術衆に
まぐれて主を撰久しく浪居に後義連の信と胤
つて其主を得たりと信ふ於是奇計密謀数多に
て大功を現はせり長尾為明に信伏して能従て事
をあやまらば忠誠比類あり廿八騎此隊頭なり義
連に先たつて病死す年五十八

鷲塚熊太郎

生園武藏はくぬ盗賊の張本也身の丈六尺有餘に

して。武藝を能く。普通の大力にて。志極て大なり。後
 義連の臣とあり。前行を改て忠義を専らして。武
 勇戦功不可勝計。其功龍席の五臣より重く。年五十一
 霧浪逆平

生國上野。元來盜賊の張本也。後志を改て義連の臣
 となる。強力にして。武藝より長す。其功多し。討死の時
 年四十八

濱田五郎

生國相模。義連の臣となつて。武功多し。太刀打武勇
 の忠臣あり。討死の時。年三十七

竹澤平治
 泉崎主税

両士生國上野。幼少より義連と友らして。正は兄弟
 の如く。力量ありて。貞固の忠臣なり。武藝に長して
 戦功多し。殉死の時。三十四歳

原十太夫

生國信濃。元來村上家の臣なり。大力よりて。槍術の
 名人。智才明辨の勇士あり。後義連より従て。武功多し
 年四十歳

志賀彦惣

生國上野。上杉憲政の臣あり。諛言よりして。退身し
 後義連より従て。忠戦を多し。勇力武藝にすぐれ。心利
 なる士なり。年三十五

根本猪之八

生國上州始盜賊霧浪が手下なり。力量あつて武藝
長ず。義連の臣とあつて功多し。年三十三

内田主水
滋野右膳

尚士兄弟あり。生國常陸内田ハ槍を能くして威儀
重の士也。滋野ハ劍術を達して力量もぐれり。共
義連に仕えて。忠戦功多し。内田卅四歳。滋野卅一
歳

泉田六郎

生國下総貞固一圖の勇士にて。力量あつて。武藝を
能く。戦功多し。年三十一

吉田金吾

生國上州幼年にして武藝よまぐれ。勇力あり。義連の
近臣とあつて。戦功多し。年二十一

富澤彦
豊嶋萬

両士生國武藏彦十四歳萬十三歳にて近臣と列す。
あ人太力よして武術を能く。志なく功をあらはさず。
の美童あり。殊に寵賜を知らる。年十九

石黒弾右衛門

生國武藏よりめ。鎧塚が手下。強力勇武よして。志極
て忠貞あり。よして。擧げて近臣とある。戦功尤多
し。龍丸入水の時殉死を。歳四十一

石部九左衛門

生國下總武勇早業の力士あり。義連に從て戦功あり年三十

門倉牛右衛門

生國下總大力の勇士あり。義連に從て忠戦あり。年三十二

宇津磯之助

生國安房ら馬の達人力量あり。義連に仕えて二度く高名あり。年二十八

千葉馬之助

生國上総荒馬乗ら術に達せし勇士なり。義連に仕えて戦功あり。年二十九

安達助八

生國下野太力ら術に達したる力士あり。義連に仕えて戦功あり

長野長藏

生國越後大力にして忍の名人あり。義連に從て功をあらはし。年不知

宇多儀右衛門

生國常陸忍の名人にして勇力の士なり。義連に仕えて功多し。年不知

水上忠藏

生國下野を以て惣塚が手下の盜賊なり。後志を改めて義連に仕えて近臣となり。太力也早業の如し也。年不知

生國下野。力あつて武藝よき。義連の臣となりて。忠戦功をあらひ。年三十一

猪膜十兵衛

生國相州早道の達者。無双の力士なり。義連の後て功多し。年三十七

木津伴右衛門

生國信州大力の勇士。義連に従て戦功あり。年不知

浪合久八

生國伊豆水練の達者。強力の勇士なり。義連の後て志ばく功あり。年不知

右義連の近臣。古八勇士と号す。一騎當千の士なり。其傳記

戦功。道人の説を聞て。委く記憶し。今既遺忘多く。且當記を失して。僅よ生國生年を畧記す。三木成久述

森島權三郎

生國下野。長尾監物が郎等なり。為明が傳統を繼て。軍術は達し。城壘陣營は尤長せり。長尾歿後。遺命を受て。野及二荒山に隠して。密に其法を傳よと云

關東古戰錄總目錄

壹之卷

- ① 青田道資見氣附談死事
- ② 山形八郎出身附富永兵庫橫死事
- ③ 小楯半七郎出身附嫁逢危難事
- ④ 山形季照仇討附根本楯之八事

貳之卷

- ① 小楯半七郎為者附原十大夫事

- ① 一色太郎左衛門生立附西田伊豆事
- ② 城戸次郎太郎生立附盲父逢切害事
- ③ 城戸持廣仇討附石黒彈右衛門事
- ④ 長尾監物生立附山中逢異人事

三之卷

- ① 城戸持廣安房團退去附志賀彦惣事
- ② 城戸持廣与山形季照結義附石部九左衛門事
- ③ 淡河六郎義孝為屯附西田討策

并 岩篠勢敗軍事

- ④ 一色時範靈夢附宇津磯之助事

四之卷

- ① 一色時範岩測遁去事
- ② 淡河義孝迷女色附戰死事
- ③ 一色時範勇力附婚禮之事

并 鷲塚熊太郎事

- ④ 一色時範與城戸持廣結義事

并ナリ陶山トウサン上總ウツノミ仕會シカイ事コト

五之卷

① 足利アキラ太郎タロウ生立ナマタテ附ツケ不思議フシギ事コト

并ナリ澤平サハヒラ治泉チセン崎主サキヌ稅事ゼキコト

② 長尾ナガオ為明ヲシノブ山形ヤマガタ季照キテル為ナリ太郎タロウ之ノ臣事シノコト

附ツケ為明ヲシノブ智謀チボウ事コト

③ 城戶キヤウ持廣チヒロ為ナリ足利アキラ太郎タロウ之ノ臣事シノコト

附ツケ霧浪キリナミ逸平イツヘイ事コト

④ 鹿島カシマ悪次アクジ郎ロウ出身ナラヒ附ツケ與ト小措コソク仕會シカイ

并ナリ長尾ナガオ與ト三英サンエイ士シ集會シカイ事コト

六之卷

① 長尾ナガオ為明ヲシノブ苦平クヘイ井勢イセ事コト

② 足利アキラ太郎タロウ入イリ吾妻ウマツメ山事ヤマコト

③ 鹿嶋カシマ愚次ウヂ郎ロウ旅途リョト武勇ブユウ

附ツケ百百ヒャクヒャク九十九クジュウ水ミヅ上忠藏ウチノサウ事コト

④ 足利アキラ太郎タロウ東國トウクニ徧歷ヘンレキ

附 所と得勇士事

七之卷

① 足利太郎畿内周游附受領

并濱田五郎事

② 山形季照出羽國にて騎射附逢危難事

③ 長尾為明討畧那須勢敗軍事

八之卷

④ 秩父権藤太送寄足利義連防戦

附 英士武藝勇力事

② 七星英傑集會附廿八勇士事

并軍評定事

③ 新館夜討附忍勢敗軍事

④ 足利義連與成田下総守和睦

附 山形季照使節事

⑤ 義連奥方出産男子出生

附 母公逝去并婦人等働事

九之卷

一 常陸國小張城夜込 附 落城事

二 柏宿軍之事 附 濱田五郎討死事

三 下総國小金原合戦 附 為明奇討

并 近邑人民帰服之事

四 武州角田川水陸軍之事 附 西田謀畧事

十之卷

一 小楯半七郎横死 附 西田伊豆病死事

二 武藏國鴻巣合戦

附 霧浪逸平討死事

三 義連与北條氏康和睦

附 為明使節事

四 一色太郎左衛門時範水死

附 妻女貞烈事

五 足利左京亮源義連逝去 附 長尾監物為明死去

并 奥方自害竹澤泉寄殉死事

六 鹿嶋忠次郎討死附小張落城事

七 足利龍九城戸次郎太郎持廣入水

附 鷺塚熊太郎以下義士死事

八 新館焼止附山形八郎季照夫婦義死事

跋

以上目錄終

關東古戦録卷之一

目錄

一 青田道資見氣附讒死事

二 山形八郎出身附富永兵庫横死事

三 小楮半七郎出身附姊逢危難事

四 山形季照仇討附根本楮之八事

關東古戦録卷之一

青田道資見氣附讒死之事

蒙竊に考るに、建時應仁年中、足利源義政公の治世に當
 て、畠山徳本の家督、卓論ありて、政長義就遂に絳櫛を起
 細川左京大夫勝元、政長に黨し、山名左金吾持豊、義就に黨し、
 京洛に於て戦を起む。こと年あり。日本國中の諸將、其縁を因て
 徒黨し、國家混乱、用嗣以來、如く大變あり。これより、王威衰へ
 室町の武権、棄物とあつて、英雄割劇し、國を争ひ、疆を掠む。
 君臣禮を失て、主を弑して、其國を奪ふ。父子大倫を礼
 て、父を弑して、自立せざるあり、強有力者、匹夫たりを以て、國
 主となす。懦弱の將領、國を放きて、飄蓬と為あり。天下土崩の
 禍、壞亂正に極めぬ。其間、よける英俊、豪傑、時を得て、名を後

代は輝く凡庸といへども、驥尾は附て過當の功名を釣る者寡う
らす。且徳行智才武略勇敵の賢者英物時不達して功半
にして早世。雄畧人傳じて後世に於る事無不可勝算。天
の才を降と必やあま事ありしむ。然るに時利ありは命數
限ありて後、草本と共に朽去しむ可憐とせん。可憐とせん歎
誰これ為よ。一大息せむをあらは頃人五百四代後土御門
院の御宇足利義尚公の時よ及て。東國此の如に裂。八州副諍の
巷とある。山内顯定。上州平井の城。在。扇谷定正。武。河越に
あつて。二家同姓仇讐とたつて。戦日空しき事なり。顯定猛
威。又はの里。定正の勢漸く。殘陽の西山は傾く。有様たり。が
家。兵。右。田。左。門。尉。道。資。文。武。の。才。あ。つ。て。寛。仁。よ。て。軍。器
を。主。君。を。補。佐。して。政。を。執。り。人。民。を。安。育。し。兵。を。帥。て。能

堅陣を破り大敵を走らしむ。因茲東國の諸將自ら顯定を
跡で。定改は暇歸する者數をあらは。顯定大は。統て諸臣を
集て。定正の君臣離叛の間に入る。謀他事なり。道資は武
及日暮里に在城して。武右衛門左より。文明十八年。主君定正の
居城。因。團。川。越。軍。議。の。事。あ。つ。て。道。資。を。以。て。計。り。て。立
越。暫。滯。留。の。間。軍。勢。の。餘。暇。を。以。て。一。日。近。士。女。を。一。連。城
外。よ。出。て。野。徑。を。吟。於。す。城。の。東。に。ひ。の。の。大。池。あり。伊。三。沼
と号す。池の廻り數里にして。池中紅白の蓮あつて。花盛んを
る時。芳氣近邑にみち。老若貴賤群集して。小舟を漕。つ。れ
て。これ。を。折。る。時。今。春。あ。れ。ば。水。面。開。花。して。か。ぎ。や。ま。く。數。魚
波。心。に。躍。り。水。鳥。百。子。う。ま。く。道。資。大。は。困。難。を。得。て。奉。院
は。床。机。を。直。し。酒。盃。を。把。て。勸。を。盡。し。既。に。薄。暮。に。及。て。統。鎮

満月生し、夜を回して八廣原空淵とて忽に景色を増し春
 月の既望赤珠と珠らしく道資與日素して再醉をつくる
 折から西前の池水より一條の白氣起て天より昇り隠ると
 て満す道資煙でおれを望に吾城の上に其氣集積して
 遙に北斗星を祀も池上の氣益濃く起てやまの磐石を望
 見て道資進士を顧て誰かお原白氣の所在を尋てまゝ香
 乳と云に伊沢某と云る者某池水よ入て其起る所をよつれ来
 んと云道資大に悦て下部五六人を指して是を命と伊澤
 直に進て池邊にうつて身れば池中西南に當て水深くと覺
 て水草が死取らるる白氣生ずを水中よりある前相違ある
 らに六指強せん衣類を脱きて一刀を腰に挿て池を飛也て
 水底に潜入暫して消息なければ道資心ならず池邊に倚

てこれを伺ふに、半時を如きにして浮之上五尺餘の石箱を抱
 く。主人の前より置く某水底よ入るにふかたこと数丈水の
 いや、かふる事、劍を以て膚を裂くごとく強く潜入は又
 丈餘して水氣全くなく平地のおとく一盤石のうゑりば
 石箱を置く箱の中より氣のぬるこも煙の如くたちよつて
 これをらんといふれが忽として童子来て某しむつて曰
 け石箱を神人少斗を封じ玉氣を貯ふ時節を来して完
 時ハ王者起り豪傑國切を立時不至してこれを開けハ玉氣
 後に散りて多砂をすの用さる者二歳のあつに、英龍の
 豪傑起るといふも、其功を金とべ、英名煙波して後世に知
 らし事申し、志れども、汝ら主人氣を足して是れ探らんといふ
 一度人間の耳目は觸つハびさく爰に終人かす、池邊す

持てて主人と與へるを怯て、負糧を逃し、せしむるに終て
 去る所を知らず。故に、尅限あると云とも、氣息を常々
 たりとす。道資、嘿然として、伊澤が河を穿て、異人の云を
 てする時、吾國の怒兵を更ん。然とも、負ありとの云、或して、
 うさふハ勇士の恥る所なり。妖ハ徳の傍に、勇不肖たれども、
 道資一不義を以て、正を以て死を得る。君も乃
 緯せざる所なりと。鉄鞭を揮て、石箱を擧げ、碎て、
 なるも、忽雷電をびたし、大地震動して、池水も沸き、
 本風よなびき、團の白光箱中より、花出て、碎て、
 東に飛去て、一帯の五雲輝半とて、遙に吾居城の
 際、繞し、須臾して、雷電を以て、池水をさく、月光
 照り、道資、吾國の恩を以て、た右を顧み、伊澤を以て、
 昏

倒して不起、龍よて、是を味ハ、教人、夢の覺るごとく、
 不致て平伏も、道資、いりぎ、帰途を促て、五更に及ぶころ、
 い、竟に城の中へ、ゆぐる。教日を經て、川、秋を辞して、居城に
 由り、剛坐して、前日の、其事を思ふに、凡て人間、其事を
 以て、始て、然こ、成、知と云とも、天の降、も、
 未、前、に、其事、極る、故に、古より、神人、未、然、に、通、量、
 符、識、を、顯、も、要、他、と、て、これ、を、取、も、も、智、量、の、偏、小、
 する、の、こ、も、我、身、の、災、難、ハ、目、前、よ、来、も、可、恐、
 我、居、城、ハ、王、氣、の、集、聚、ハ、二、の、後、い、ろ、ろ、名、將、あ、り、
 を、保、ん、や、桑、ろ、に、主、君、定、正、暗、昧、
 此、を、補、佐、見、國、滅、立、所、い、ろ、ろ、
 東、國、の、支、領、他、人、の、子、に、濟、る、
 七、星、の、感、化、も、

そき達ならんう。後世不可知と。國家の爲よ心神亭勞と。快くして不樂。不達獨智を以て不断こと。智識よりして可決と。禪相の道人兼て道資。從て道をよ智識を以て密に前日の始末を語。道人大驚て曰。神人秘封の石箱をのれの新ること廿年。よ及ぶ老僧。れをか賞されども。時代を考るに未だ地にあらび。後來明君。以て冥命と思。に不計も君の覺悟の術。以て。見を覺む。く。人智。得がごとくして。智。以て。身を擯。ぶ。君一を。身。て。二を。不辨。輕忽。して。以。徳を。あ。せ。る。今。の。職。よ。立。て。ば。災。を。除。べ。る。宣。職。を。辭。して。隱。者。と。な。り。身。を。令。く。して。其。時。を。待。た。修。職。必。君。の。家。よ。及。ぶ。七。星。の。英。士。と。し。君。の。家。を。補。佐。せ。ら。る。君。一。人。の。事。に。あ。ら。び。天。龍。を。以。て。英。傑。と。し。其。事。を。保。べ。し。万。一。君。災。

達。不。て。其。身。を。殺。さ。ば。七。英。天。地。を。廻。し。鬼。神。を。驚。の。術。と。し。後。よ。其。切。を。頭。と。し。あ。ら。び。芳。名。後。世。よ。垂。べ。う。ら。び。先。見。明。白。吾。ん。て。奇。異。と。せ。し。こ。事。教。年。前。より。知。り。道。資。怯。で。れ。を。す。て。曰。禪。師。の。教。示。よ。う。て。天。の。符。織。の。あ。ら。ま。ら。ぶ。事。を。知。る。然。と。も。今。國。家。強。壯。よ。し。て。主。君。弱。ら。り。れ。を。控。て。身。の。災。を。免。は。ま。ぬ。わ。る。の。日。即。國。家。敗。亡。の。端。に。た。り。災。の。身。に。及。ぶ。を。恐。て。國。家。の。正。に。込。を。か。へ。り。足。る。は。子。の。道。よ。あ。ら。び。後。來。の。七。英。士。の。有。功。無。功。ハ。そ。の。人。の。天。命。よ。あ。ら。び。某。心。と。し。ま。る。亦。よ。あ。ら。び。禪。師。の。我。を。憐。れ。感。佩。せ。ば。あ。ら。び。唯。國。家。主。君。を。捨。て。ん。恐。と。も。義。氣。凜。乎。と。し。把。ま。べ。う。ら。び。道。人。嘆。曰。君。ハ。濁。世。の。忠。臣。澆。季。の。賢。者。あり。然。と。い。へ。も。主。君。の。災。ハ。君。の。存。命。あり。不。老。

ぬを尋ふ及ていさかしの謀を聴て眼を乞御所も武成
 て何事なく眼を乞らる。領國の内より名家をひきひて武
 名を韜光してらる。馬の術に達したること。性
 隠れゆく。近邑の諸士密に慕て門人となる。兵庫之身好む
 道やれこれ拒む。性く教示す。因茲身を遠めて門人高
 く見らる。或時門前より葉間して五十討の美女十五
 六歳の少年を伴て兵庫に對面せんことを乞ふ。富永不
 審よりとも。先を度る。清令より。貴家の事やう。かたて。吾れ
 等甚難れども。生得賢からる。形相して。殊に。悍く。容貌
 美。麗。として。眼光何ぞ。ぬ。人。なる。べ。い。つ。れ。も。あ。る。と。の。や
 思ひ。これ。を。兵庫。陣。に。あ。る。ハ。母子。に。ハ。何。れ。の。人。何。の。位。後
 の。藩。士。なる。や。何。ある。事。あ。つ。て。果。に。對。面。を。乞。ふ。と。云

又。被。婦。人。つ。て。あ。ん。て。親。子。の。者。ハ。東。羽。州。の。者。あ。る。か。ち。史。あ。わ
 つて。生。國。を。退。め。一。浪。士。こ。り。つ。て。下。野。に。正。流。あ。つ。て。居。候。せ
 里。或。時。自。ら。夢。中。に。廣。原。を。徘徊。せ。し。北。斗。七。星。の。向。遙
 隕。く。ら。を。見。て。これ。城。追。ひ。手に。執。て。懐。中。より。こ。り。見。て。夢。の
 中。に。史。より。夢。の。こと。有。て。一。人。の。男子。を。殺。ぐ。史。及。して
 後。執。事。万。苦。して。育。立。て。山。形。八。郎。季。徳。と。号。し。と。兼。十。四
 也。生。得。英。氣。あ。つ。て。馬。の。術。を。好。む。と。云。へ。も。師。こ。も。乞。ふ
 人。稀。あり。然。る。に。君。の。英。名。を。守。て。渠。一。圖。了。門。人。た。ん。と。と
 形。自。も。亦。して。武。勇。の。や。ど。才。傳。く。ぬ。れ。バ。む。ら。に。御。頼
 中。魚。心。底。まで。交。に。身。ま。り。國。政。さ。び。く。して。他。の。人。を。不
 止。澄。方。つ。ま。て。押。掛。て。御。頼。の。御。頼。に。一。子。の。願。を。乞。ふ
 届。あ。つ。て。師。弟。の。約。を。守。り。ぬ。れ。と。親。子。ひ。き。伏。て。や。ん。ぬ。バ

兵庫甚其志、感、廻、生、立、唯、者、あ、れ、は、仗
 くこれを肯、即、我家の別室、止宿、あ、れ、は、人、といふ、就
 子、抱、伏、して、大、い、い、み、た、れ、は、富、永、中、生、実、一、所、て、上、裁
 事、す、た、れ、は、幸、射、術、の、秘、古、と、て、諸、士、集、居、れ、は、先、八、郎
 一、命、一、て、弓、を、射、し、し、も、に、強、弓、を、能、引、て、百、發、不、中、と
 云、事、なり、諸、門、人、大、に、獲、を、備、し、兵、庫、も、村、美、し、て、城、に、受
 の、弓、勢、吾、れ、を、教、育、せ、ば、天、下、を、右、よ、左、よ、の、稱、あ、ん、と、こ
 せ、し、る、至、相、當、射、身、に、添、て、これ、を、教、導、せ、ば、日、に、進、月、に、長、て、
 一、業、及、て、教、年、飛、煉、の、高、身、自、ら、を、術、を、と、り、た、れ、は、皆、不
 平、の、心、を、抱、き、密、に、妬、む、思、む、人、も、多、わ、り、ぬ、と、及、安、房、の、屋
 見、家、より、坂、東、一、の、荒、馬、星、鹿、毛、と、名、付、し、を、室、主、一、進、望、あ
 り、た、れ、は、所、所、不、料、よ、う、と、い、ひ、ひ、廣、を、一、牽、出、さ、せ、ん、海、舟

馬相、帯、に、當、り、面、色、画、不、純、の、如、く、四、足、違、して、括、め、し、似
 た、里、丈、抜、難、よ、と、な、れ、て、自、隸、の、と、の、中、く、棄、乃、魚、と、い、ひ、て、さ
 り、々、義、明、近、長、の、馬、上、の、達、者、を、常、と、て、これ、を、索、せ、し、む
 に、智、も、被、に、凶、事、あ、り、し、と、預、け、し、を、孫、孫、に、傳、え、た、義、明
 大、と、せ、し、ま、い、他家、より、賜、る、馬、を、家、士、索、せ、ん、と、い、ひ、て、或、者
 の、恥、辱、あ、ら、ん、と、思、ひ、富、永、兵、庫、に、命、を、と、り、被、り、子、の、
 中、に、必、し、馬、を、索、者、あ、ら、ん、と、も、兵、庫、は、有、る、處、と、首、先
 ハ、富、永、損、傷、多、く、領、事、一、生、害、藩、中、の、門、人、之、人、山、形、八、郎、
 を、傳、へ、師、着、り、人、世、に、所、所、は、相、信、せ、し、義、明、機、嫌、く、事、進
 馳、急、す、る、事、相、妙、な、り、し、馬、房、州、より、若、菜、が、た、り、へ、も
 孫、之、の、數、士、索、し、と、あ、り、た、故、母、に、あ、り、し、ん、は、こ、の、馬、後、家
 事、叶、べ、し、と、因、茲、招、り、早、と、索、せ、し、め、ん、と、い、ひ、
 七五

と宣へば、兵庫尉にて二人の弟子に命じて、おしむるにあ人
 八忽にもひあされ、一人の弟は、これを一歩もこれをまゝに
 ことあるに、赤面して下馬をせ、兵庫鐘で申す、これと
 よは馬無雙の強定なり、これを宗ゆんものなまゝ、若者
 ちかして叶をわたり、赦免あらん尊前を宗ゆんやと、何六
 一折柄より、渠も宗ゆんあよ、吾も一説に、これと宣へば
 兵庫の形を招て、これを命じて、八郎ちのも、膝をひ
 まるくと立寄て、馬相をみるくと、着得し、ひつり、宗に
 は馬の強定なり、これと申す、宗ゆん、これと申す、宗に
 て行く行、大將ゆめ、諸士、是を足るに、二三遍、宗に
 ちかして、強を命じて、これを地を、恰も大風の、宗ゆん
 駿定、腰中に、駿ゆん、教遍、追切、これを止め、下馬して、礼教

をせられ、上下一回、聲をよて、強定も、我明わさる、
 く感嘆ありて、近江にて、名を、兵庫例より、八郎
 と申す、折られ、未恙年よて、此、術を、現、これ、人、
 ち、仕官の、必、他家へ、行、我、は、て、我、功、を
 頭へ、と、種、賜、物、ありて、賜、を、り、八郎、八郎、謝、して
 兵庫と共に、立、帰、る、是、より、て、領、申、よ、て、彼、馬、を、宗
 換、者、元、を、かれ、是、と、能、得、り、八郎、諸、士、集、て、宗、
 き、當、家、よ、て、一、匹、の、馬、を、宗、得、こと、ある、に、八郎、却、て、八郎、宗、
 隠、こと、生、て、禄、を、食、ふ、ら、ず、當、家、を、何、事、なく、退、
 せ、指、臆、病、の、名、を、取、置、し、下、治、思、入、て、兵庫、八郎、を、暗、打
 して、當、家、を、立、退、ら、し、評、議、一、決、して、黨、を、か、れ、若、九
 人、馬、淵、久、藏、沼、澤、治、部、吉、村、十、兵、衛、此、三、人、八、兵、庫、の、弟、子

八段なく息絶す。心剛なる八郎も、就と恩師を一事に可
人手に掛く。六無念の涙より、九思慮の思慮して、近郷へ
達し。涙ながら友人の墓を奠り、その所を居候
たり。おとく早蓮より旅より、怨歎沼沢吉村を討留んと
そことも多かりし立出たり

楮半七郎出身附好達危難事

信州更科郡八村之家の領事あり、林城外の氏家に一人の
曲者あり。元来甲州武田家の産みて、柴川九郎と云ふ強
欲不敵ありて、無道の行跡多かりければ、武田家より逐出
され、振汚山中にあつて、盗賊をかき、取の強者を手下
とす。心の傍に要行をせりければ、其頃鬼九郎と異名を呼て
諸人より、恐會り、渠強氣に任せて、林の株を採取て、旅

をあげんと心掛て、手下の者を皆山中に残置て、自劍術の
師をかきて城外に住居し。城中に窺をれども、武法に家
なれば、いさゝ透を伺ことれし。其時鬼九郎諏訪明神へ衆
詣りて、湖水の辺の酒店に入て、酒肴を呼て、揚船し、酔
をりて休多に、旅の士友人、これも方を暗んそ、酒店に入
て酒を飲居り。鬼九郎二人の物語をひそく、すに、一人
の士濁るる、思のやうにならば、達して、早一果に及ぶ。二人
れ者も、八郎に切殺されし由、おれれば、必我くを仇として、湖
傍より、今一人の云らる、我もさうか、おのに、究竟の事、こ
あれ、高國の山中に、柴川九郎と云者あり、かのもの我と、内
縁おれれば、これに因て、めを恨ん、にあらうきこと、おの

と何心あり。嗚呼。免九郎多智。幸と思ふ。二人の前
 立ちおく。高田山中の。柴川と八郎。我あり。亦方何人ぞ。我
 と保ふこと。や。一方。疎略の詞。あらず。其座を起せし。と保め
 つけて。召されば。友人。其勢。大に恐し。一人の士申。けふ
 ハ。備へ。教。さ。柴川氏。茶。派。澤。治。部。と。して。生。か。す。の
 藩。士。也。も。殺。と。ハ。紛。か。さ。足。弟。也。是。が。る。ハ。吉。村。十。兵。衛。と。云
 者。が。る。也。武。藝。の。意。赴。あ。り。て。富。永。兵。庫。と。云。家。者。を。討。て
 立。退。た。り。因。茲。も。方。を。斬。暫。く。力。を。思。ん。と。思。ふ。代。り。面
 を。示。し。何。の。喜。こ。れ。と。思。ん。と。吉。村。も。諸。氏。に。懇。懇。と。申。け
 れ。バ。九。郎。完。爾。と。打。交。ひ。殊。に。親。族。の。縁。相。違。り。境。を
 隔。て。對。面。叶。され。ば。其。人。も。あ。ら。さ。り。き。た。と。海。へ。く。とも
 交。断。ハ。我。圍。て。安。方。を。さ。し。む。べ。し。其。あ。り。富。永。兵。庫。ハ。聽。き

英士あり。えを討て。立退。とハ。健。也。も。働。あり。聊。漫。意。を
 ま。と。打。ら。り。ゆ。ぎ。云。れ。ば。友人。係。泰。山。の。後。楯。を。持。て。
 大。は。後。び。面。を。ぬ。て。殺。益。を。傾。子。女。に。授。け。男。女。の。年
 色。す。れ。ば。二人。立。出。て。これ。を。見。る。に。市。計。の。旅。の。女。と。り。ん。く
 て。容。顏。端。葉。なる。が。大。の。男。女。人。を。多。理。に。引。立。け。ん。と。云。ひ。
 け。女。懐。劍。を。抜。て。已。等。推。参。め。る。者。と。も。う。な。女。と。お。も。ひ。あ。る
 と。も。も。武。家。の。育。し。自。ら。わ。く。近。寄。り。怪。我。さ。ら。る。や
 為。構。して。云。れ。ば。二人。の。男。打。つ。ら。ひ。昔。く。加。賀。國。より。移。れ。て
 已。を。奪。ふ。と。ま。て。殺。自。つ。け。終。り。ふ。と。い。ふ。連。の。士。邪。魔。と。云
 つ。て。刃。を。合。さ。ら。し。今。綱。よ。る。の。揚。屋。と。紀。伊。と。一人。の。下。部
 同。類。は。打。殺。さ。せ。道。ハ。久。る。家。子。を。掛。る。車。も。な。り。怪
 か。あ。り。て。ハ。吾。が。誤。と。する。い。ぶ。為。常。に。付。ん。と。友人。打。ら

く立寄て。女の腕をむねとせり。ませりて。駈歩ふを。鬼九
 郎より。魚て。花掛て。いふれば。二人の男。腹を立て。己何者
 ぢれば。妨とせり。鬼九郎。細付ハ。いふと。投出せば。一人と。所
 ぞ。如く。附。これをも。あて。押。依れば。一人。ま。起。て。九郎。が
 と。ふ。を。引。互。流。石。の。九郎。と。あ。人。より。て。餘。一。敗。る。危。く
 足。く。れば。吉。村。沼。沢。火。寄。て。一人。を。引。傷。し。二人。て。切。殺。せ。ば。
 九郎。も。一人。を。踏。付。て。首。打。落。し。彼。女。を。女。抱。して。備。も。老。さ
 ぬ。中。へ。い。ふ。ち。人。ま。て。何。方。へ。の。旗。あ。か。ぞ。と。念。頭。は。同。々。れ。ば。女。ハ
 恨。て。自。ハ。村。と。家。の。下。原。十。太。夫。と。云。者。の。妻。女。ぢ。り。本。國。ハ
 武。將。と。て。父。ハ。小。指。形。初。と。い。浪。士。あり。自。三。四。某。の。時。母。懐。妊
 して。十。三。月。に。して。産。せ。び。一。日。大。は。怒。こ。と。あり。に。あ。や。地
 老。人。来。て。曰。必。愁。る。こ。と。ぢ。れ。生。る。子。無。双。の。英。士。あり。これ

を。以。て。懲。と。せ。よ。と。一。封。を。渡。して。油。を。ぬ。父。母。指。き。ん。人。貪。狼
 星。と。記。せ。り。大。は。怪。し。七。日。を。過。て。赤。孝。と。云。て。男。子。を
 得。り。ま。う。ゆ。れ。て。た。の。ま。を。用。ひ。三。日。し。て。始。て。む。ら。く。貪
 狼。星。の。字。あり。ま。い。前。を。着。の。筆。跡。は。違。ふ。一。終。是。愛。定
 て。育。ま。る。に。幼。年。より。心。立。不。欲。し。て。剣。術。を。好。む。幼。少。に
 之。人。は。恨。を。む。ま。ぶ。お。に。父。存。生。の。う。ち。ま。ら。め。の。爲。勤。尚
 せ。り。去。年。父。の。系。期。は。乃。て。勤。尚。を。ゆ。る。一。足。手。の。力。に。せ
 よ。と。進。言。ま。て。竟。し。殺。せ。自。ら。親。命。を。受。て。弟。の。後。居。を。為
 る。に。加。斐。國。より。一。同。定。て。夫。ハ。戦。陣。ハ。暇。か。さ。力。な。れ。ば
 自。旅行。して。弟。に。尋。當。り。對。面。せ。し。に。當。時。小。指。半。七。郎。と
 号。以。救。年。ハ。方。に。因。縁。して。剣。術。を。以。て。名。あ。る。人。と。立
 合。小。迫。合。あ。れ。ば。知。人。は。固。く。戦。場。を。物。と。武。功。數。度。に。及

一度の不覺をこらへ、猶主人を擧て浪きう父の不救
 の殺を恨と云ども死期不達を悔歎て自とも更に更
 料の細り墓前に罪を謝せんと俱に旅行せしに今卯
 第八酉利あつて暫く跡に訪り。若一人下部と道に掛
 ぶ。以前の二人を心懸を執つた月で。何ゆゑかおまじりた
 語を早めあらぬ西へ東里。下部も途中をくれ不覺
 の難儀に逢ふ。あふ。歩方の懐より月で恥辱をすぬれ、
 謝の本意なきなりと涙と舌に預られ、鬼九郎もくも安心
 女れ我侍て更料へ送る由まいらせんと。これより二人は女房を
 折連て一里を歩り、約さ人聚まれなす。あふ。おて鬼九郎不意に
 起て女房を捕へ手拭きて、扇座は様書をうけて二人を
 向て申さる。これ究竟の事さ。び女の夫原十を夫ハ。村と家の

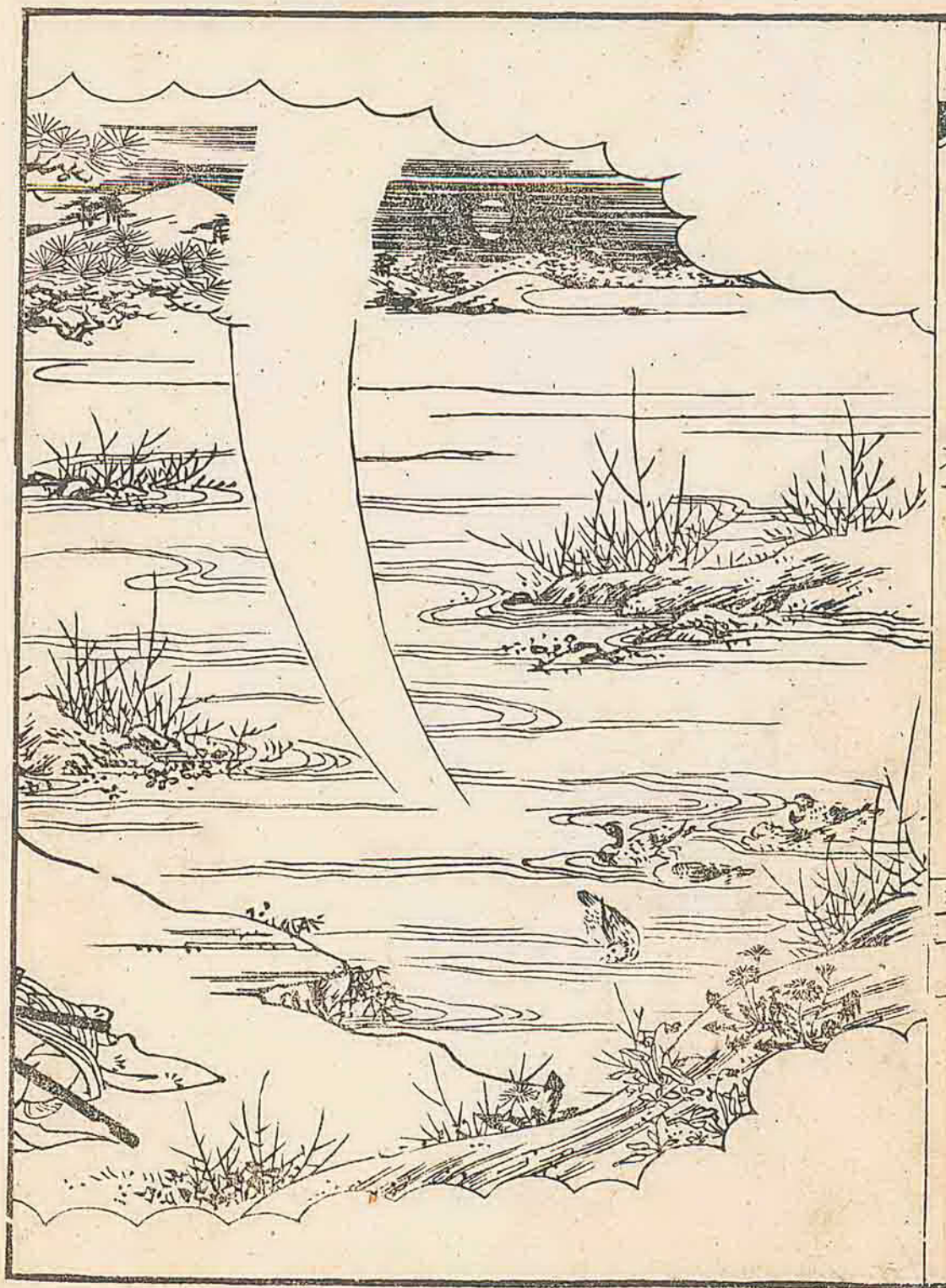
勇まあり。若此女を解うて一味同心させ。大室の船とせん
 と決然ともい女健氣をれば、夫ささく自害して身をり
 ならん。おに斯のやぐ行ひ。口耳を塞ぐる。段を極ふあり。若
 ぬ人は女を擧て山中の戦卒宅へ侍ひ行。隠分うく。い。とを
 て安心なす。む。然るに山中の同類、あふ。をあらう。と
 毎に門内入る。うら。懐中より一枚の切手を出して、先
 を渡す。鬼九郎は是より引別て更料へ立ゆ。ぬ。ぬ。人途に
 見送て、其後、様書を取捨て女に向て申さる。唯今の士ハ
 更料の者として、あて。歩方に。怒慕して。日を。素に。若。擧
 て手に入らう。若。ぬ。人ハ。若者として。日。け。めて。出。合。珠。に。一。面
 の交。せ。れ。も。危。を。身。て。これ。を。助。け。皆。道。路。を。共。よ。せ。が。思
 う。べ。歩。方。を。子。ゆ。り。て。若。を。若。並。て。び。近。邑。に。初。人

きて馬成りとめて湯方を備へり。吾あ人隠し忍び臥
 糸とる也。然とも女の獨道甚危し。幸海路へ出て舎弟に
 對面がらしめんと。底意なく借られば。女居ハ十方に於て
 只よ死桶よとぬくを頼つ。丈夫う暫く後へ向つ。山路掛て
 鬼九郎が隠家へ急行ぬ。斯とハ知れぬ小楯半七良し。お
 里婿よをくれ心づらび急し。知る者お向て路を遮る。更
 申を馳て訪訪よむて桶子を伺ふ。大の男二人道路よ切殺
 されたり。半七郎心よお重先酒屋よ入て休息し。靜まらう
 是を尋らば。亭主僧の趣を細くと語。鬼九郎が侍行ル系
 おと成候らるよ。半七郎も心よこひ。奴こそ七人の汝はさる。盜賊
 の張本。必実意あるにあらびと。鬼九郎が信面を尋らば。是
 より八九里去て。山中に居るを尋らば。恰も味郭の如し。

梨子を根がらして。斯とに假の住居をたり。一國を徘徊
 中。奥に海邊ハ。山くも。守定て。さうけなく其所を立去
 て。これより道を急き。岩を踏。樹木を攀て。一時餘りて
 山中に就き。るる。一民家に立寄て。九郎が家を守定て。打替の
 糧食つらひ。山嶽を攀て。一里をうり。登者ハ。大なる門を。こら
 ち。あてを。さうら。れば。恐し。大男二人立出て。何者ありと。いふ。小
 楯。り。る。ハ。我ハ。旅の者よ。て。今朝。諏訪の宮よ。て。我婿の。ちん
 系を。抱ひ。是よ。て。運。ら。う。こと。ま。里。謝。終。り。が。ら。に。系
 ら。し。通。され。よ。と。云。バ。二人。あ。せ。笑。て。吾。が。頭。竟。に。人。を。斬。り
 事。を。さ。う。び。必。其。妙。と。云。ふ。英。色。あ。る。に。よ。り。て。荷。捲。の。桶。を。に
 見。せ。く。何。方。へ。う。連。行。遠。く。賣。ら。る。亦。ハ。心。に。應。と。れ。ハ。妻。と
 して。一時の。樂。と。言。ひ。何。索。せ。家。つ。れ。ある。こと。あ。ら。る。を。さ。び

早く立寄りせと志相なく云はれれば小指かゆやう。何れ
 此所へ来る事あることあらう。暫く待合せ其より手返る
 處と云々。早晩果となりぬれば是非門を穿て一宿を
 杉入と別く布云はればあ人顔ていさ遠入まうと雁を寄け
 半七鳥喜て何むなく立入るをた右より組付て運送
 者より旅人此所へ迷ふて生てゆふ者一人あり。観念せよ
 と押付きバ小指多て隠便まれば窓より其を利捕んとハ
 推器も極の奴京と雙の身を伸てあ人の首の骨を押し
 うんと云て突放せばあ人一時は息絶る。此ハ是非も
 一家同極切せんと進でもう一つの門はあつたものをい
 つと這入を此所よふ人のぬき人どもを合せ大に強て
 押ゆきを二人を配て投出。まふこ強用て送と白眼の強

らびのいと云て進中がにまう。見成ぬきまう。こ
 一こよる。潮の湧がごとく。五六十人のぬきむをらんが
 一近集て其中に丈技群よまくれる大男。先可進
 でなんど何者なれば此所へ来り狼藉よ及と云はれば小指
 兎刺のをを答。始の門をちる二人我よ敵對よう。打
 殺せるよ。等も我と指突心ならバ一人も道さ。とた刀
 提てつらバ彼男腹をま。鬼九島よたの浦れてこの新成
 ちりわらに我よ向て舌長なる荒言覺悟せよと大を刀
 振て切て掛るを。小指ちりとも驕と。立向ふとんら。指
 のゆく肩間へ深く切めて。互刀に首打落せば。益古大少
 て。殺す人。被連て立向ふを。小指勇んで戦。其形相。電
 一似て。指も形を。見定。事。頃。頃。史。十八人。枕を。あて



切伏せしるを、残る奴原を獲て、一面に平伏し、君を捕らんとし、
 人間よあはれ、戸隠大の神の化身なるべし。若しこれより思
 九郎が手を放し、君の手中に孫成り下知し、皆皆神と同音
 又託れば、半七郎、それより真の亭へ入れば、狂嵐
 玉をこぎき、堂上の御所も、能くあつらふ、あつらふ女
 多くあつて、其中よあ三人の美女ありて、九郎が、
 たるより、小指女の家を尋らば、皆大高豪民の、
 郎が為し、集めて、むらび、むらびに、申すも、
 を添て、不目、親里へ、油を、きり、申すも、
 涙を流し、汁を、小指の思ふ、一山の主と、
 の行末を、免やせ、角と、早、入れば、
 具表をあ、翌日、洗堂の盗賊を、集り、百人、

これハ小指一、其面一、娘の、
 人も、
 を、
 して、
 之ハと、
 立然て、
 立止る、

山形季照仇討 附 根本猪之八事

去程、原十太、妻女、
 踏迷、
 下、
 謝して、一酒店、

二人心は仕瀧しつりと収て刃心も打忘れし清て是を
 飲女房耳言をかりて強多れバ酔よきまよ又婦の醜
 乳を奪れ飽り沈酸しあ人睡眠されバ女房大は収て甲
 斐くお福引よて不知らなりとも尋問バたしけ故郷
 へ帰らる事あらんやと足は収て欠初りり。暫ちてあ人
 睡安たし受ておろりをみるよ。女房あられバ大は収て不
 禁肉の道なれば何方とも不命。一先山中の宅へ為行て居
 所を定め盗賊原よ逢て歸は忽ち捜し出さべしと酒店
 のまよ具了同定て陣よ尋得て山中よあり門を敲て切
 を渡しされバ番人猪之八は達せしよ。根帯立出て次弟
 同面これが山主の姉ぢらんと思われバお所路より人を預
 て途中にて取逃しし所へ本事は不覚の至なり。とよも九

歸来おバお所命を保ことあし。別よ禁肉の者を差込
 べし何卒して右の女を捜し求て来らるべしとおに申人
 すぐりて是を命し。路後食糧をあへて山の外威しられバあ
 士甚恐て亦引ひて立寄らる。此時原が妻女ハ山中二三里
 外れハ是擲て血流息つれて眼くらくらされバ一足もあし
 わさびに。跡受人お穢なれば詮方つた果て側の岩よ獨
 掛て萬一以前の二人の跡あらバ死めを交さるら。憐れ自
 害せんし。懐紐を握て何処ら折らる事若さき也り掛を
 て此跡を見付らるぬ跡よて行るが。立由て動くら不審
 女子人の跡。跡又足擲て氣息頻よつ神らる。察する如危難
 を道て来らる。やと云よ。女房涙を流し。べし次身を注け
 まバ彼士しれを夢補し。記事たり。吾幸よ更科の智をて

旅行をば送るに送るにせんと。懐中より血止を出して是
 を毛息合をあててへて女抱すれば女房其志は感ず心強
 くなりたりや。も力は然して後君の情よりして再び更
 二相見しをゆば生おの大恩なりと。おとせし度よ。
 沼沢吉村遙より見付ておもしろき女あると。大に悦
 て逸来し駈奔してよくき女め方便して遊るして。やう道さん
 やと。た右より花掛るを以前の士立ちつて。二人をばて突飛
 せ。あ士夫は怒て何者なれば科人の肩持ぞと。双方より
 俣考を彼士急度見て。やをれ已等沼沢沼沢吉村十兵衛は
 あらうらうらも師範をよ掛て逆電をたうらうら。天
 の責道々折あらんや。八郎を足忘らうと。をのふと
 白眼ハあ人大は初轉るゆるるが。遊ぬふと覺悟して。同は

切掛るを心得しと。板合二打三打外。あ人介。うらハ歌
 すべさうい。振て遊ゆを。山をりり。矢を射るごとく。追
 掛て谷底まで。竟は追追。ならなく。二人をばて。投す。えく首
 を打落して。凶阿は。向て。懐を達し。れ。今ハ。前の女
 を伴ひ。更科へ。送届。それより。下総へ。赴人と。誓より。刃て。われ
 ハ。彼女房。行方。なし。あせ。三。交。れ。ら。甲斐も。なく。見。失。さ
 る。我。本。意。を。れ。あ。人の。目。に。捕。へ。り。極。う。然。も。も。乃。迄
 分。し。ま。バ。ハ。所。も。詮。方。なく。勢。行。わ。ら。あ。旅。人。四。五。半。毎。掛
 る。これ。幸。と。立。寄。て。来。来。世。許。の。旅。の。女。を。見。掛。し。や。と。尋。れ
 ハ。皆。答。り。ハ。一。人。の。美。女。を。鬼。の。様。なる。男。背。負。左。右。よ。あ。三
 人も。附。添。て。山。を。行。こと。平地。の。如。く。先。刻。造。り。見。届。され。た。
 今ハ。早。山。道。二。里。も。隔。んと。し。り。す。を。指。着。て。旅。人。ハ。初。す。死

する心形心よ思ひるハ一旦思ひ思ひ脚んとハ云らるが敵奪
 けよりらハ跡を求めて死にすべし義理もあけまがあけぬ
 敵に打るんと立出すが勇士の一言ハ金鉄あり一婦人ハ言を
 違ふも百人ハ傷をなれどもいづれも一怒敵ハ赤果せり命
 限よ死にんと前へ進みし山へ花がめよ池のほとりが。鞍向よ
 して彼門より入りて一先足を休つ。業因をこらふあらば心よ
 く毎のすくと外より旅を押しつぎつと入門をちり盗
 二人こハ雅藉と立寄をた右へ投出。綁上池水は同一と
 あり一人の旅の女を油等と同然にせこれへ連れし。直
 ちやんハ命を助んと云られハ半程先別旅の女を連れ
 二の門を参らると震慄さ云らるふら。より夫よ此安
 堵せりと二人を許て二の門を近付て先別を捕らる旅の

女いつきの者見えて逆よ来りし。尋常は復す處と云色
 手れハ根本猪之八門内より立出。旅の婦人の連の由
 指すべし。右の婦人は申す所を答よ及べ。我く盗
 賊よ此婦人を奪しよわらぬ即ち主の好なれば時の急
 難下の者よ思ひ背負て立出。あり。脚も奪らり難
 らすすらよあらず。貴殿の姓名承んと申らるよ。心形心侍
 す。ハ根本が禮義の心よ強押しんも何ぞと。吾姓名
 申さふ及らば彼婦人は相見あり。一言を述べてのと暫も止
 る者よわらずと云らるよ。原が妻女此由を告げて立出先
 こころへ入あきと云よ。ハ片辞退して途中より危難を
 救しあせん。と云らる唇も乾らるよ。形を承見し。一言の
 信を失を死て。これまで終れとも角味方安さよを

且すれハ我必死も憂ふるにたわぶ無用の某これあり
 正に立向んと出立を女房類はこれをさめ猶も八も念
 頃ハ心細ハ是非なく門内に入て一間の座敷へ入りしハ
 女房申するハ此刻物後やせし我身の上此所へ入り安座
 の辨いぶうく思ふまじんハ此者を始りてさう君の知る
 者一人もたし尤世亦竟もさう事なり然る君二人の士
 を怨怒とて鬪諍の隙ハ大の男四人来て小指の姉君は
 てをさひらちやと云ふ心駭てさう程半七郎が姉君十大夫が
 妻ありと云ハ右の者とも情で御迎ふ怒りと云て其怪奇
 有て交まれば此猶之八と申者念はよる事とて其君の
 如く饗ふ心ならず其分を云んとさうは内ハ君身中ハ未
 我身とて如何なるかと不審と申されハ山形もいぶうけ

根存は向ていふる者も斯婦人を致すと尋ねれば
 猶之ハさう某ハ上州の者もて霧浪逸平と云る透波の強
 卒と親友あり逸平強物と云ともさうは悪行をなさば此
 下は住居を以て免九郎が暴悪を思てこれを追逐して下
 此者共を味方と服せしめんと密に某を差越さる某よく
 九郎は後て下下の者ともを猶くさすは九郎が悪行を
 うとて居れば大半某は組せし前日小指半七郎姉君
 の九郎が為し奪いとすて此所へ尋ねり勇を據て數十人
 を殺傷す其働人ハあらず某始る心腹して降を乞ふ
 使くこれを交て大物を哀憐し分て某は恩義を説て竟は
 一山を某に托して其身ハ更科の九郎を助て姫君の行末
 を云んとて出て出さる然るは君のまじ掛りし人九郎が

切手を打て、旗の女を死にせしとて、事よりて然らば、妙
思をハシしと思ひ、上侍増人を添て、これを捜し、ぬ、地人を
探て、密に妙君を刃付ハ、お人を切殺て、是より探れり、べしと
申付らる。謀の毎、妙君をぬらる。およ、君身で連なりと
云、必九郎が一味と、おのひ、討て、探んと存せしが、勇威眼中
の獲て、某、お及こころ、あら、方便で、打捕んと、慥と
慥、慥より、せし、妙君の情、ゆる、因て、正、人、とハ
存らると、あ、細、は、妙、も、あ、心、し、心、も、按、相、違、し
て、な、ま、て、心、解、姓、名、を、名、乗、い、と、ハ、一、刻、も、早、く、小、楳、氏、の、通、
遊、安、地、を、さ、し、ひ、る、う、婦、人、を、更、科、へ、送、南、る、は、二、つ、よ、出、
べ、う、う、と、相、談、な、り、ら、る、が、山、形、急、度、思、案、を、て、吾、怨、欲、を、
討、て、より、一、先、下、迄、へ、立、越、て、生、實、の、所、所、へ、訴、せ、バ、更、科、へ、

立、あ、て、小、楳、も、對、面、し、て、右、の、始、末、を、傳、へ、る、は、山、
を、も、て、不、意、に、鬼、九、郎、來、ん、も、ハ、か、り、ま、ね、バ、山、形、と、用、心、を、加、
ふ、ゆ、う、と、さ、あ、ハ、山、形、を、ぬ、き、ハ、婦、人、の、書、状、を、乞、更、て、山、
形、ハ、更、科、へ、と、急、ら、る、。

